

『パリとベルリン』（仮）

第1部 東方への衝動

第1章 アレクサンダーの東方遠征

第1節 ペルシア侵攻

ペルシア戦争

まずは、世界史を習ったことのある者なら知らぬことはない「ペルシア戦争」から話を進めよう。前492年、オリエントの大国アケメネス朝ペルシアがギリシアに侵攻した。ギリシア人が植民して経済的繁栄を謳歌していたエーゲ海一帯のポリス群とペルシアとの紛争が発端である。この第1次ペルシア戦争ではマラトンの戦いでアテネの重装歩兵がダレイオス王に勝利したが、前480年、クセルクセス王の侵攻によって第2次ペルシア戦争に突入する。今回はギリシア側もアテネ海軍を中心に陸軍主体のスパルタが連携し迎え撃つ。まずは、大挙して北方から回り込んでくるペルシア軍をレオニダス率いるスパルタの精鋭が天険テルモピレーにて迎撃し全滅、映画「300」での感動的シーンでもある。さらに南下してきたペルシア軍に対して、アテネは陸上で焦土戦術をとるとともに、サラミスの海戦で勝利を収める。

ギリシアは全3回にわたるペルシア戦争に勝利したものの、ギリシア人同士の連帯を欠く性質は相変わらずのものであり、アテネ、スパルタ、テーベと主導ポリスに移り変わる「ペロポネス戦争」が続く。澄み切った空のもと白い家々が紺碧の海に映えるエーゲ海、ギリシアの政治はこの透明感とは無縁の世界である。この戦争で、テーベのエパミノンドスは単斜陣と呼ばれる陣形を使用、スパルタ軍を粉砕する。この陣形は、最初に自軍の最も強力な部隊を相手の翼側に衝突させて粉砕、後方に回り込むことによって包囲を達成しようとするものである。この戦術は、後にカルタゴのハンニバルによって完成度を高め、対ローマのカンネーの戦いにおいて用いられる。

ギリシアがこのように内部抗争に明け暮れている間に、その北方ではフィリッポス2世に率いられるマケドニアが台頭、テーベをカイロネイアの戦いで破り、前336年に20歳のアレクサンダーに継承される。父フィリッポス2世はギリシアのアリストテレスを雇ってアレクサンダーに帝王教育を施し、同時にその教育にアレクサンダーの友人たちにも参加させた。教育内容はギリシア文化から政治学や倫理学に及び、アレクサンダーはトロイ戦争を描いたホメロスの叙事詩『イリアッド（イリアス）』を好んだようである。これによって、アレクサンダーが率いる軍団の各隊指揮官クラスや側近グループが同時に養成される。

この時点で、マケドニアの西にはエトルリア人を概ね平定してイタリア半島の統一

に向かうローマが、東にはペルシア帝国、その東には仏教が広がり始めマウリヤ朝が建国されようとするインドがあり **(注1)**、さらに中国は戦国時代であった。当時のアケメネス朝ペルシアはエジプトや小アジアからインダス川流域に至るまでの広大な領域を属州に分割して総督に統治させ、それぞれの属州の習慣や宗教に寛容な対応を取り、「王の道」と呼ばれる道路網を整備するなど、帝国の統治に関する完成度を高めていた。ここからユーラシア大陸における壮大な世界史が始まる。

東方遠征の始まり

アレクサンダーは自国をギリシア圏と考えていたようであり、ペルシアのギリシア侵攻への報復として対ペルシア戦争に着手、前 334 年にヨーロッパとアジアを隔てるヘレスポント（現ダーダネルス海峡）を越える。続いて、グラニコス川、イッソス、ガウガメラと戦勝を続けペルシア内陸部に侵攻する。これらの戦いにおいて、マケドニア軍ではファランクスと呼ばれる長槍歩兵とヘタイロイと呼ばれる貴族の子弟から成る重装騎兵が主力である。また、戦術的には両軍の歩兵の戦列が前後左右に移動する中で僅かに生じた敵陣の間隙を、前線で指揮するアレクサンダーが直属のヘタイロイ騎兵とともに突破し、敵将の後方に回り込むという戦場での機転を重視するものであり、帷幄のうちに勝敗を決するというものではなかった。

ここで話を一気にペルセポリス占領に持ってきたところではあるが、後方の安全確保という課題があり、話を現在のトルコの東部地中海側で行われたイッソスの戦いの後にもどきたい。当時、ギリシアはマケドニアの下に完全に服属していたわけではなく、またギリシア本土以外にも多くのギリシア人による植民地が地中海沿岸に散在していた。そのため、アレクサンダーはペルシア内陸への侵攻に前もって東地中海沿岸からエジプトにかけての一带をマケドニアの支配下に置かなければならなかったのである。

アレクサンダーは前 333 年から東地中海沿岸に沿って南下、その途中に海上要塞都市であるティロスを 7 か月にわたる苦難の末に陥落させる。野戦に強いアレクサンダーも攻城戦にはてこずるのである。当時、エジプトはペルシアの統治下にあり、前 332 年末にアレクサンダーの軍が近づくと抵抗をやめ、彼は容易に首都メンフィスに到達してファラオの称号を受け継ぐとともに、ナイル川デルタの西端にアレクサンドリアを建設する。この都市はヘレニズム世界最大の都市となり、現在のエジプトではカイロに次ぐ第二の都市である。ティロス攻防の 7 か月という期間は、ペルシア王ダレイオス 3 世にとって戦力を再建する猶予期間になるとともに、気候の良いナイルデルタでの 6 か月はマケドニア軍にとっての休養期間ともなった。

アケメネス朝ペルシアの滅亡

翌年の前 331 年、アレクサンダーはペルシア内陸部への侵攻を開始、ユーフラテス川を渡り、ティグリス川を越えたところの大軍を展開しやすい平原ガウガメラで両軍は激突する。ペルシア軍 25 万、マケドニア軍 5 万である。この会戦において、ペルシ

ア軍は新兵器として鎌付きチャリオット（戦車）を用意してきた。陣形としては、ペルシア軍が歩兵の両翼に騎兵を配置する通常の形であるのに対し、マケドニア軍は両翼の騎兵が斜め後方に角度をつけて後退しており、一見、数にものを言わせるペルシア騎兵の攻撃を受け止めやすい防御の形である。また、アレクサンダーと直属のヘタイロイ騎兵は中央の重装歩兵と右翼騎兵の結節点に位置する。

11月1日、両軍が布陣を終えると、まずマケドニア軍は戦列を維持したまま右前方にせり出してゆく。戦列を維持したまま横方向への移動を組み合わせるには高度の訓練を必要としており、訓練の行き届いたマケドニア軍にはそれが可能であった。マケドニア軍の陣全体が右方向に移動することは、ダレイオス3世が持ってきたチャリオットが標的の正面からそれてしまうことを意味する。また、マケドニア軍右翼が左翼よりも前に前進することは、マケドニアの強力な重装歩兵の圧力がペルシア軍の左翼のみに加わることを意味する。これは、かつてテーベのエパミノンダスが対スパルタ戦に向けて編み出した単斜陣と呼ばれる陣形である。

そこで、ダレイオス3世は標的がペルシア側から見て左方向にずれてしまわないうちにチャリオットを突進させる。しかし、これはマケドニア軍にうまくかわされてしまう。後のローマとカルタゴの最終決戦であるザマの戦いにおいて、カルタゴ・ハンニバルによる象軍の突進をローマ・スキピオの重装歩兵がかわしたのと同様である。このチャリオット攻撃が空振りになった後、ダレイオス3世は戦列をマケドニア軍の移動方向に合わせて移動させようとするとともに、騎兵に両翼から回り込む包囲攻撃を命じる。しかし、ペルシア軍の練度はマケドニアに及ばず、左翼と中央の間に間隙が生じる。その瞬間、そこをめがけてアレクサンダーとヘタイロイ騎兵が突入し、ダレイオス3世に側面や後方からの脅威を加えて勝敗を決したのである。



(塩野七生『ギリシア人の物語Ⅲ 新しき力』から抜粋)

ガウガメラでの勝利に続き、アレクサンダーは当時メソポタミア最大の都市バビロンに入城、総督マザイオス以下のペルシア高官を引き続き登用する。これは、少数のマケドニア人が多数のペルシア人を統治するための必要に迫られた措置であったが、同時に東西融合政策の始まりともみなせるものである。次いで、行政の中心であるスー

サを占領してペルシア王となり、翌年の前 330 年には王都ペルセポリスに入城する。この時代のペルシアには王都がスーサ、エクバタナ、バビロン、ペルセポリスの 4 か所にあり、ペルセポリスは儀式用、他の 3 つは季節によって使い分けられていたようである。

最果ての地へ

ここまででペルシア征討という目的は達成された。しかし、アレクサンダーは逃げたダレイオス 3 世、さらにダレイオスに反逆したベッソスらの地方総督を追って、ペルシア帝国の周辺部であった中央アジアのバクトリア、その領域の多くは現在のアフガニスタンと重複する、方面へと侵攻を開始する。そのルートは、現在のテヘラン付近から「カスピ門」越えて東進を続けてアフガニスタンのヘラートに入り、山岳地帯を大きく南に迂回してカンダハルに向かい、カズニを通過してカブールを目指すものである。このルートは現在アジア・ハイウェイ 1 号線となっている。グーグルマップを見ると、今はヘラートからバーミヤン近くを通過してカブールに通じる道ができているが、当時は行軍に適した山岳路がなかったものと推測される。

アレクサンダーは彼らを追ってカブールに入り、そこで冬を過ごす。前 329 年春にヒンドークシ山脈を越えてソグディアナ地方に侵攻する。ソグディアナはオクソス川（アムダリア川）やヤクサルテス川（シルダリア川）が流れる現在のウズベキスタン東部とタジキスタン西部にまたがる地域であり、現在ではサマルカンドを首都とするウズベキスタンとなっている。彼らは地元のソグディアナ人や、さらに北方のスキタイ人を巻き込んで山岳地帯の砦に籠るなど頑強に抵抗したため、アレクサンダーは平定戦に 2 年を要した。



(塩野七生『ギリシア人の物語Ⅲ 新しき力』から抜粋)

この過程でアレクサンダーはヤクサルテス川河畔の最果ての地に都市アレクサンドリアを何か所か建設してギリシア人を住まわせるとともに、美人の誉れ高い豪族オクシュアルテスの娘ロクサネと結婚する（前 327 年）。これは現地との和解という政略結婚の意味も持つが、他方で東方かぶれの進むアレクサンダーと側近の間に隙間風が吹

き始め、グラニコス川の戦いでアレクサンダーを間一髪のところまで救った友人のクレイトスを宴会の席で刺殺するという悲劇も生じる。

バクトリアの地を平定した後、前 326 年、アレクサンダーはインドへの侵攻を開始する。当時、現在のパキスタンに当たる北西インドはペルシア帝国の宗主下にあった。カイバル峠を越えたマケドニア軍は現地の首長らを帰順させながらインダス川に到達し、舟橋を架けて渡河する。さらに進んでヒュダスベス川（ジェルム川）へと進んだところにはポロス王率いる強力な軍勢が待ち構えていた。激戦の末にこれを破って帰順させた後、さらに東へ進もうとするが、ここで大問題が発生する。

ここまででアレクサンダーの軍勢は疲労に苛まれていた。さらに、まだその先にはインダス川の支流がいくつも続く。しかも、現地の湿潤な気候や病害虫は敵兵以上に恐怖を駆り立てるものであった。兵士たちからはアレクサンダーに対して「どこへなりとも遠征なさるように」との声が出始める。そこで、彼もやむを得ず帰途に就くこととした。ただし、来た道をただ引き返すのではなく、インダス川を下って、そこからペルシア王都に進むのである。

インダス川を下る過程でアレクサンドロスは敵意ある現地人の矢を浴び、瀕死の重傷を負う。快復後、インダス川河口、おそらく現在のタッタと思われる、からは極度に乾燥した炎天下のゲドロシア（バルチスタン）を沿岸に沿って行軍し、ペルシア湾から来たネアルコスの艦隊の救援を受けて、ようやくの思いで王都スーサに帰還する。この行軍があまりにも過酷であったためか、バビロンに移動した後、前 323 年 6 月 10 日、高熱を発していた 32 歳のアレクサンダーは逝く。その後、彼の大帝國は後継者争い（ディアドコイ戦争）を経て、本国のアンティゴノス朝マケドニア、プトレマイオス朝エジプト、セレウコス朝シリアに 3 分割される。

支配領域を拡大させるにつれ、統治の必要性からマケドニア・ギリシア人とペルシア人の東西融和が進められることになり、今なおアレクサンドリアとして存続するエジプトの都市だけではなく、遠くバクトリアの地までギリシア植民地が建設された。カブールやカンダハルもその一つである。おかげで、中国西域のミーラン（鄯善）**(注 2)** からギリシア起源の有翼天使像が発掘され、日本でも奈良法隆寺の回廊にその面影が見られる。なお、現在のマケドニアは 1991 年に旧ユーゴスラビアから独立し、首都をスコピエとする。しかし、古代マケドニアの領土は現在のギリシア内にある。

第 2 節 アンティゴノス朝マケドニア

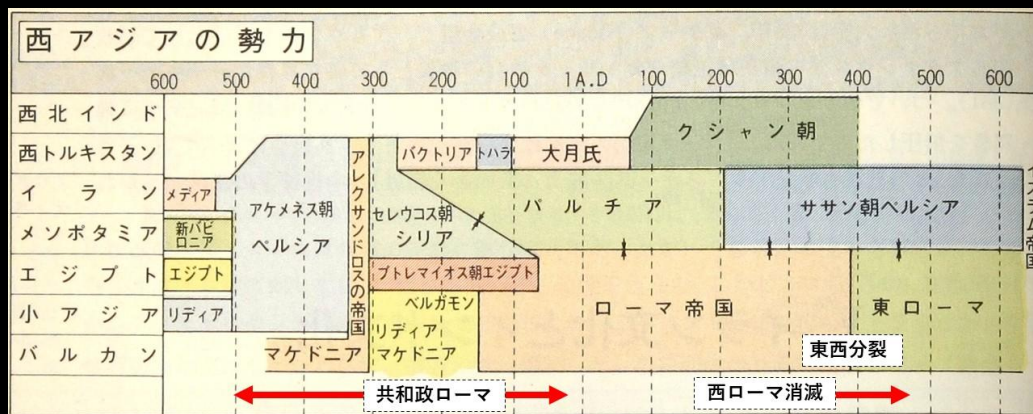
ローマの台頭

ディアドコイ戦争のなかでも前 301 年のイプソスの戦いとその後の帰趨に大きく影響し、ヘレニズム三王国の原型が形作られる。この時期、西ではローマがイタリア半島を概ね平定し、東ではインドにチャンドラグプタによるマウリヤ朝が建国されている

(注1)。マケドニアはイプソスの敗戦によって小アジアを失っており、その後、アンティゴノスの後継者たちはさらにギリシアのピュロス王との戦いで危機に瀕するも、孫にあたるアンティゴノス2世の下で基礎を安定化させる。

前272年にイタリア半島を統一したローマにとって、その向かう先は東ではなく南西方向の海洋都市国家カルタゴであった。このローマとカルタゴの戦いはポエニ戦争と呼ばれ、第1次から第3次の3回にわたり、それぞれ現在のシチリア、イタリア半島、カルタゴ本国のチュニジアが主戦場であった。前264年から始まる第1次ポエニ戦争では、海洋国家であったカルタゴが陸上戦に苦戦するとともに、パワーベースの大きいローマが海上戦力を整備したことによってローマ優勢のうちに終わる。

カルタゴは大土地所有であるハンノ家と交易を重視するバルカ家の2つの名門に分かれていた。第1次ポエニ戦争に敗れた後、カルタゴのバルカ家はスペインを打倒ローマの拠点に作り変えようとする。前221年、ハミルカルを継いだ娘婿ハズドルバルが没すると、ハミルカルの長男ハンニバルが総督として後を継ぎ、ローマへの報復を誓う。アレクサンダーが20歳にしてマケドニア軍を継承したのと同様に、ハンニバルもこの時、26歳の若者であった。



(吉岡力『研究 世界史』(旺文社 1973年)から抜粋に筆者加筆)

ローマとの対立 (マケドニア戦争)

前218年、第2次ポエニ戦争が勃発する。ハンニバルはスペインの根拠地カルタヘナを發ち、フランスからアルプスを越えてイタリア北部に侵攻する。カンネーの戦いをはじめ何回かの大会戦に勝利するものの、パワーベースの大きいローマは次々と新手を繰り出し、戦場においては決着がつかない。

そこで、ハンニバルは次の手を打つ。前215年、ハンニバルはマケドニアのフィリップス5世と同盟を結んだ。マケドニアとローマはバルカン半島のアドリア海に面したイリリア地方で紛争を起こし、ハンニバルがイタリアに攻め込んでくるまではローマが攻勢に出ていた。ただし、マケドニアはアドリア海を渡らないとローマを攻められないという問題を抱えていた。ところが、ローマも次々と手を打っていく。ローマは

アドリア海側の海上戦力を強化するとともに、ギリシア・アエトリア人の対マケドニア蜂起を支援、また、マケドニアに脅かされてきた小アジア西部のペルガモンにも働きかけた。このような包囲網によってマケドニアは封じ込まれる。

また、前 210 年には弱冠 25 歳のスキピオがスペイン戦線における司令官として選出される。本来は 40 歳以上の執政官または法務官が司令官として任じられるのであるが、彼の場合は前法務官としてであった。戦場で采配を振るう人材が払底していたのである。しかし、ローマは柔軟性を失ってはいなかった。こうして、ハンニバルとの対戦から多くを習ったスキピオがハンニバル不在のスペインに派遣され、前 209 年にカルタヘナが陥落、スペインにおける最終決戦である前 206 年のイリパの戦いでは、スキピオがカルタゴ拠点のカディスへの退路を断つ位置に布陣して勝利し、カルタゴ領スペインの全土が崩壊する。

ローマによる地中海覇権の確立

カルタゴに傾きかかった戦局は、マケドニア、シチリア、イタリア本土の全てでローマ優勢となり、スペインは制圧され、ハンニバルはイタリア半島南部に押し込まれる。ここで、ローマはスキピオを執政官としてシチリアを完全に制圧し、しかる後にカルタゴ本国を衝く作戦に出た。前 204 年、スキピオは 2 万 6 千の兵を率いてシチリアのマルサラを発ち、カルタゴのウティカに上陸する。ここで、スキピオはチュニジア内陸部ヌミディアのマシニッサとの同盟関係を再確認する。カルタゴ本国軍は敗れ、ローマとの講和が締結されようとする。ところが、カルタゴ内の主戦派がハンニバルをイタリアの戦場から呼び戻し、最終決戦となるザマの会戦に突入する。

前 202 年の秋、両軍はザマの平原に陣を展開する。ここに、ハンニバルは 45 歳、一方のスキピオは 33 歳、ティチャーノの騎兵戦で相見えてから 16 年が経過していた。ハンニバルの軍勢は 4 万 6 千、一方、スキピオは 4 万、騎兵戦力ではヌミディアのマシニッサを加勢したスキピオが上回るが、ハンニバルは 80 頭の象部隊を伴っている。これをどう使うかがこの戦いの鍵であった。両雄の無言の会見に続き、戦いの火蓋はハンニバル象軍による横一戦の突進と、スキピオ騎兵による左右からの攻撃によって切って落とされた。スキピオは象軍による攻撃を事前に予想していた。通常は軽装歩兵と重装歩兵を横一線に展開するのであるが、この日は小隊ごとの間に象の通り道を作っていた。ハンニバル重戦車部隊の突進は空振りに終わったのである。その後には、カンネーと同じく、騎兵戦力に優る側による包囲戦が続く。

この第 2 次ポエニ戦争におけるローマの勝利によって直ちにカルタゴが滅亡したわけではない。それは約 60 年後の前 146 年となる。しかし、地中海に有力な敵対勢力が不在になったことで、ローマは対外拡張政策に転じる。パワーバランスが崩れたのである。

まずは前 197 年、マケドニアの動きに対してギリシア勢力から支援の要請を受けた

ローマは、かつてのマケドニアとハンニバルの同盟関係を咎める必要性もあって出兵、これを撃破する（第2次マケドニア戦争）。前183年に小アジア北西にあるビティニアに亡命していたハンニバルと、ローマで政治的に不遇であったスキピオがこの世を去り、前179年にはマケドニアのフィリッポス5世も没する。これで第2次ポエニ戦争の立役者はほぼ退場することになるが、この頃からローマの対外政策はますます先鋭化し、前168年にマケドニアが属州化される（第3次マケドニア戦争）。ローマはピュドナの戦いでマケドニアに圧勝し、ローマによるヘレニズム諸国征服の端緒となる。また、ローマ帝国領となったマケドニアは、紀元408年のローマ東西分裂によって東ローマ帝国（ビザンティン帝国）の一部となる。

第3節 セレウコス朝シリア 旧ペルシア帝国領の統治

イプソスの戦いで勝利したセレウコス1世はバビロニア総督であったことから広大な東方領域を統治することとなる。セレウコスはペルシア人のアパマと結婚し、その後の夫婦関係も良好であったため、領域内の安定的な統治を行なうことができ、首都セレウキアをティグリス川流域のバビロンとバグダッドの中間地点に建設する。彼はイプソスの戦いに先立ちバクトリアとインドに侵攻するが、インドでは前317年にマウリヤ朝を建国したばかりのチャンドラグプタに敗れ（前304年）、インド領と500頭の象を交換に講和を結ぶ。この象部隊がイプソスの戦場に生きてくる。

セレウコスの領域は元ペルシア帝国の大部分を含む広大なものであったため、統治を容易にするため息子のアンティオコス1世を共同統治者として東方に派遣する（前294年）。このため、当節ではセレウコスが直接統治した現在のシリアとイランに相当する地域を扱い、アンティオコスが統治する東方領域を次々節の「バクトリア」で扱うこととしたい。守谷 **[注3]** によると、セレウコス王国はアレクサンダー帝国よりもアケメネス帝国の後継者であるとされる。

セレウコスはイプソスの勝利の後、セレウコス朝の首都アンティオキアを建設する。現在のシリア・トルコ国境の地中海寄りトルコ側にある。地理的条件から見て、かなり西に偏っており、セレウコスは東方の統治よりも西方進出への関心が高かったのではないと思われる。その後、セレウコスは小アジアにも進出するが、前281年に暗殺される。また、アンティオキアはローマやアレクサンドリアに次ぐ大都市となる。

セレウコスの死後、アンティオコス1世が帝国全体を、その息子のセレウコス（小）が東方領域引き継ぐ。この時点で帝国全体としての統治は一応機能していたが、西方でも東方でも争乱が相次ぎ、国力が低下し始める。まず、バクトリア地域では紀元前250年頃、ディオドトス1世が支配地域のバクトリアを独立させてバクトリア王国を建て（前250年頃）、ペルシアではアルサケス朝パルティア（中国では安息国と呼ぶ）が興る（前247年）。

ローマとの攻防

紀元前 223 年、アンティオコス 3 世が即位すると、セレウコス朝は再び拡大期に入り、パルティアのアルサケス 2 世を破る。しかし、まもなく共和政ローマと対立してローマ・シリア戦争が勃発し、マグネシアの戦い（前 190 年）で決戦に及んだが大敗に終わり、セレウコス朝の再拡大は終了する。その後、前 130 年頃、パルティアに領土の多くを奪われ、前 64 年、ローマの第 1 回 3 頭政治の 1 人ポンペイウスに滅ぼされて属州とされる。

ローマが帝政となってから、シリアからメソポタミアにかけての地域はローマとパルティアとの戦場になる。ローマの五賢帝（紀元 96～180 年）の 1 人トラヤヌス帝は積極的拡張政策をとりローマ帝国の版図は最大となる。しかし、その軍事や統治に要するコストは膨大であり、トラヤヌス帝の後継者ハドリアヌス帝はユーフラテス川をローマとパルティアの国境とし、その線を越えてのメソポタミアへ侵攻は行わなわなかった。このハドリアヌス帝はイギリスのイングランドとスコットランドの境界にも城壁を築いて拡張を自制したことで有名である。

<ローマの版図> <ハドリアヌスの長城>

このパルティアも北方遊牧民族エフタルの侵入を受けるとともに、紀元 226 年にササン朝ペルシアが興ってローマ帝国や分裂後の東ローマと抗争を繰り返す。ササン朝は 531～579 年ホスロー 1 世の治世に最盛期を迎える。しかし、642 年にネハーヴェントの戦いにおいて新たに勃興したイスラム勢力に敗れてイスラム化が進む。7 世紀前半に生まれたイスラム教はウマイヤ朝時代に急速に領土を拡張する。このため、セレウコス朝シリアの主要領域はウマイヤ朝と、次のアッバース朝（イスラム帝国）の支配下に入る。

第 4 節 プトレマイオス朝エジプト

アレクサンドリア

プトレマイオス 1 世はアレクサンダーの学友であり、大王の東征においてヘタイロイ騎兵を率いる将校の 1 人であった。大王の死後、エジプトの総督となる。前 301 年のイプソスの戦いではプトレマイオスはセレウコスらと組んで最大勢力であるアンティゴノス・デメトリウス父子と争い、アジア方面軍司令官であったアンティゴノスは戦死する。このため、アンティゴノスの広大な領域はバビロニア総督のセレウコスに引き継がれる。

その後、プトレマイオスはエジプトの国内統治を安定させ、首都をアレクサンドリアに移す。このプトレマイオス 1 世を継いだプトレマイオス 2 世も長命で安定した統治を行う。プトレマイオス父子はアレクサンドリアには王立研究所（ムセイオン）と世

界最大の図書館を設立し、世界の七不思議のひとつとされる大灯台も建設する。さらに、多くのギリシア人を移住させて、その中にはアルキメデスの原理を見出した科学者アルキメデスや幾何学のユークリッドもあり、アレクサンドリアは学問や経済の中心地として発展する。

クレオパトラとカエサル

しかし、プトレマイオス4世による治世の頃からシリアとの抗争で国力が疲弊し始めるとともに、対外膨張を続けるローマの矛先が向かってくる。国内的にも内部抗争が続き、前51年、プトレマイオス12世が死去する。その息子のプトレマイオス13世はまだ10歳であり、娘のクレオパトラ7世が17歳でプトレマイオス13世との結婚を条件に王位に就く。ギリシア、エジプト方面にはクレオパトラという名前の女性が多いが、一般的に「クレオパトラ」という場合には、このクレオパトラ7世のことを指す。

一方、クレオパトラが即位する9年前の前60年、ローマのシリア平定に功が大きかったが元老院と対立したポンペイウスとカエサル（シーザー）、クラッススの三者で元老院を軽んじる第1回三頭政治が始まる。この3人のうち、カエサルはガリア（フランス）方面に侵攻し、クラッススはシリアの向こうに新たに勃興したパルティア（安息国）との戦いで死亡する。このとき、ポンペイウスが元老院と組んだため、カエサルは「骰子は投げられた」の有名な言葉を発してルビコン川を渡ってローマに引き返す。カエサルはファルサケスの敗戦からエジプトに逃げたポンペイウスを追ってクレオパトラとの関係を結ぶ。クレオパトラが絨毯の中にぐるぐる巻きにされてカエサルの前に躍り出るといふ有名な話はこのときのものである。しかし、カエサルはプトレマイオス13世側の市民との抗争に巻き込まれ、アレクサンドリアの図書館とパピルスの巻物に書かれた40万巻の書物を焼失させるという失態もあった（前48年）。

カエサルは政治的にも軍事的にも卓越した成果を示して独裁者の色彩を強めたため、ブルートゥスらによって暗殺され、カエサルの養子であるオクタヴィアヌス、アントニウス、レピズスによる第2回3頭政治が始まる（前43年）。この時点で、オクタヴィアヌスはポンペイウス（子）の艦隊を支配下に収め、一方、アントニウスはエジプトを根拠地としてパルティア征討の準備にかかり、クレオパトラと結婚する。この両雄の勝敗はアクティウムの海戦（前31年）によって決せられ、クレオパトラは自殺に追い込まれる。

アクティウムの海戦

アクティウムの海戦は、ギリシアのプレヴェザ湾の内部にいるアントニウスの艦隊と、それを封鎖しようとするオクタヴィアヌスの艦隊による海戦である。艦隊ではアントニウス側がエジプトの大型船をそろえて有利であるとみなされていたが、オクタヴィアヌス側の小型船の運動性能が優っていた。最終的には資金提供国エジプト女王クレオパトラの作戦への口出しが多く士気を下げ、海戦中に彼女の直属艦隊が戦場離

脱を図ったことから決着がつく。この湾内では、後の 1538 年にオスマントルコとヴェネツィア・スペインを主力とするキリスト教側連合艦隊の海戦が行われ、オスマン側の勝利となった。現在、湾の出口南にアクティウム、北にプレヴェザという地名が残っている。

アクティウムの海戦への勝利に続いてエジプトを属州として併合したことにより、前 27 年、オクタヴィアヌスは元老院からアウグストゥス（尊厳者）の称号を与えられる。ここに共和政ローマは終わりを告げて帝政が始まり、プトレマイオス朝エジプトは終焉を迎え、ローマにとっての主要な小麦供給国となる。また、このプトレマイオス朝の最期をもって、ヘレニズム三王国はすべて姿を消すこととなる。

エジプトのなかでもアレクサンドリアはその後も発展を続けたが、紀元 365 年にクレタ島を震源とする大地震が発生し、アレクサンドリアの多くの部分が海中に没する。現在は水中考古学による採掘が進められている。その結果、エジプトとギリシアの特徴を持つクレオパトラの宮殿や、高さが 100m 以上で 50 km 離れたところからも灯が見えたというファロス大灯台の跡などが発見され、2009 年に横浜「海のエジプト展」でも公開された。

ローマ帝国の東西分裂によってエジプトはマケドニア本国と同様に、東ローマ帝国（ビザンティン帝国）の一部となりキリスト教が広まるが、その後の運命は大きく変わり、東方からイスラムの波が寄せてくる。7 世紀前半に生まれたイスラム教はウマイヤ朝時代に急速に領土を拡張し、エジプトはウマイヤ朝とその領域を引き継いだアッバース朝の支配下に入る。

第 5 節 バクトリアの輝き

ガンダーラ美術の発展

セレウコス朝シリアが前 64 年にローマに滅ぼされたことを第 3 節で述べたが、それに先立ち、前 250 年頃、セレウコス朝東部のバクトリア（アムダリア川を挟んで現在のアフガニスタン北部とタジキスタンとまたがる地域）の総督ディオドトス 1 世がバクトリア王国を建て、シリア本体から独立する。このバクトリア王国の領域内にはギリシア都市が建設されていった。現在のアフガニスタンから想像することは困難であるが、当時は灌漑が進み、広大な果樹園やブドウ畑が営まれ、穀物もよくとれ、定住農耕が発達した豊かな地域であった（注 4）。

1965 年、フランスの考古学調査隊がアフガニスタンとタジキスタンの国境付近アイ・ハヌムでギリシア都市遺跡の発掘調査を始めた。そこはタジキスタンの首都ドゥシャンベから南に約 200 km の地点であり、小高い丘のアクロポリス、列柱門、神殿、円形劇場などがあってギリシア都市の特徴を備え、ギリシア語の碑文も見つかっている（注 5）。このアイ・ハヌムはローマがカルタゴを滅ぼしたのと同年の前 146 年に遊牧民に

よって滅ぼされる。この遺跡からの出土品はカブールの国立博物館に収められ陳列されていたとのことであるが(注6)、その後のタリバン政権の復帰によってどうなったのか不明である。



アイ・ハヌム遺跡と王宮の柱頭

(NHK『文明の道 ②ヘレニズムと仏教』(NHK出版 2003年)から抜粋)

前190年前後、デメトリオス1世の下でバクトリアは強盛となり、インド北西部(現在のパキスタン北部)に侵攻する。当時のインド・マウリヤ朝は仏教を振興したアショカ王の死後、衰退傾向にあったため侵攻は容易であった。しかし、インド内に新たに作られたバクトリアの飛び地は内紛と過少人口により自然消滅する。既に当地域ではアショカ王の時代から仏教遺跡の石柱にペルセポリスの柱頭と同様にライオンなどの動物像が載せられ、そこにはギリシアの影響も見られた(注5)。

他方で、バクトリアの本体はインドへの侵攻の影響もあってギリシア人の人口が大幅に減少し、前130年頃に大月氏と推定されている遊牧民の侵入によって消滅する。当時のバクトリアは、ローマと中国を結ぶ東西回廊と南のインドと繋がる南北回廊の結節点にあり、中国の絹をはじめ各国の産物が隊商によって取引される集散地であった。オクソス川(アムダリア川)は夏場に水量が増すため河口のアラル海から汽船でのぼれるとのことで、当時は交易によって人々が行きかい繁栄していたのである。

バクトリアの消滅はセレウコス朝本体の滅亡よりも約70年早いですが、その後世への影響は非常に大きい。漢の武帝が匈奴を挟み撃ちにするため張騫を西域に派遣(前139年)した目的地も大月氏である。大月氏は1世紀にインドにも侵入し、西北インドからバクトリアにかけての地域にクシャーナ朝を建て(注7)、2世紀半ばのカニシカ王の時代に最盛期を迎える。クシャーナ朝時代には万人の救済を理想とする大乘仏教(注8)が確立するとともに、神の姿を彫刻に表現するギリシア・ローマの影響を受けて仏像が作られるようになり、ガンダーラ美術が発展した。

このガンダーラ美術は、クシャーナ朝から中国西域へと伝播し、石窟寺院のある敦煌、雲崗や龍門を経由して、6世紀に日本にも伝播して聖徳太子らによって広く普及してゆく。インドには古来、仏像を作る造型美術上の原形と製作技術が乏しかったため、ローマ美術を原形とする彫刻がガンダーラにおいて発生・発展することとなる。これには、かつてこの地にギリシア人のバクトリア王国が存在しており、西方ローマ文化を受容する素地が備わっていたことを意味する(注9)。

ローマから日本まで

張騫の西域派遣から約240年の時を経て、後漢の時代、西域都護の班超が部下の甘英を西方に派遣する(紀元97年)。彼はクシャーナやパルティアを経て、地中海東岸まで到達する。これによって、東西貿易路はますます発展する。しかし、パルティアが強大化してローマとの抗争が激化すると通商路がしばしば切断される。そこで、海のシルクロードが開発されることとなる。

アレクサンダー大王がインダス川河口からペルシアに帰還したことに触発されて、前1世紀にはローマとインド西岸の間に海上貿易路が開発される。この海上の道も陸のシルクロードと同様に発展し、紀元166年にはローマ五賢帝の1人であるマルクス・アウレリウス・アントニヌス(大秦国王安敦)の使者が後漢の最南端であるヴェトナム日南郡(注10)を訪れる。これだけではなく、南インド海岸では多量のローマ金貨や陶器が、ヴェトナムのメコン川下流に栄えた扶南のオケオ遺跡(注11)からもローマ金貨やクシャーナ朝の青銅製仏頭が発見されており、海のシルクロードがローマと中国を結ぶ重要な役割を果たしたことが伺われる。陸のシルクロードが絹のような軽量で単価の高い産物や仏教文物を運んだのに対し、海のシルクロードでは中国の陶器やインドの香辛料が運ばれ、ローマ金貨が逆方向に流通した。先述のクシャーナ朝は海と陸の交易路を南北に結んでいたのである(注12)。

これらの東西交易路を通じた文物の交流は日本にも大きな影響をもたらしている。まず、推古天皇と聖徳太子を中心とする飛鳥時代には最初の仏教文化が開花し、現存する最古の寺院である飛鳥寺の釈迦如来像(通称「飛鳥大仏」)や、世界遺産法隆寺の釈迦三尊像には古代ギリシアによくみられるアルカイックスマイルという顔全体の感情表現を極力抑えながら、口元だけに控えめな微笑を浮かべる表情が用いられている。次の天武天皇を中心とする7世紀後半から8世紀前半の白鳳文化の時代には、法隆寺金堂の壁画にインド・アジャンタ石窟寺院や敦煌石窟寺院の壁画に見られる様式が採り入れられている(注13)。さらに、8世紀後半からの聖武天皇を中心とする奈良時代の天平文化については、正倉院に保存されている宝物に広範な国際性が見られる。例えば、白瑠璃碗や漆胡瓶はペルシア起源、螺鈿紫檀五絃琵琶はインド起源であり、平螺鈿背円鏡や平螺鈿背八角鏡には中国、東南アジア、ペルシア、アフガニスタン産の素材が使われている。



奈良県飛鳥寺の釈迦如来像（通称「飛鳥大仏」）

【注】

（注1）マウリヤ朝は前 317 年にチャンドラグプタがガンジス川中流域に建て国であり、パータリプトラを首都とする。前 3 世紀の第 3 代アショカ王の時代に最盛期を迎え、王の保護によって仏教が栄えた。

（注2）ミーランは西域南道、タクラマカン砂漠南東部に位置するオアシス都市で、考古学者スタインによって発掘された。「彷徨える湖」として知られるロプノール湖北岸の楼蘭に近い。スタインによって搬出された有翼天子像はインド国立博物館に、大谷探検隊の一員であった橘瑞超によるものは東京国立博物館に所蔵されている。

（注3）森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』の第 9 章「後継將軍たちの挑戦」。

（注4）NHK『文明の道 ②ヘレニズムと仏教』の「バクトリアとインドのギリシア王国」の章。

（注5）森谷公俊『前掲書』の終章「アレクサンドロス帝国の遺産」。

（注6）NHK『前掲書』の「ポスト・アレクサンドロスの舞台」の章。

（注7）クシャーナ朝の首都はガンダーラ地方のプルシャプラ（ペシャワール）である。この地域では古代の南アジア西北部および中央アジアで用いられたカロシュティー文字が使われ、中国西域の楼蘭にもその使用が見られる。

（注8）仏教には東南アジア方面に伝播した小乗仏教（上座部仏教）と日本に伝来した大乘仏教がある。小乗仏教は、ブッダの教えを忠実に守り、出家して戒律を守る厳しい修行によって限られた者のみが悟りを開くという考え方である。これに対し

て、大乘仏教は広く全ての人々を救済しようとするものである。

(注 9) 岩村忍『文明の十字路 中央アジアの歴史』（講談社学術文庫）の第 3 章「遊牧国家の発達」。

(注 10) 後に奈良時代に遣唐使の阿倍仲麻呂が漂着したのもヴェトナム中部であり、当時は安南と称されていた。

(注 11) 紀元 1 世紀末から 7 世紀にかけて、ヴェトナムのメコンデルタに扶南というインドの影響を受けた国があった。オケオ遺跡は 1940 年代にフランスの考古学者ルイ・マルレによって発掘され、ここから発見されたローマ金貨はローマ五賢帝アントニヌス・ピウスやマルクス・アウレリウス・アントニヌスの時代のものである。なお、オケオ遺跡はカンボジア南部の城壁都市アンコール・ボレイまで運河で結ばれていた。

(注 12) クシャーナ朝のカニシカ王はローマ金貨を鋳つぶし、新たに自分の姿を刻んだコインを作った。それはローマ金貨と同じ重さであった (注 6 参照)。

(注 13) SNS NOTE の「日本の歩き方《関西編》 <第 8 回> 飛鳥～平城京」を参照のこと。

https://note.com/mild_rue9785/n/n3ec9f169ed8a

【文献】

森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』（興亡の世界史）、講談社学術文庫、2016 年。

岩村忍『文明の十字路 中央アジアの歴史』、講談社学術文庫、2007 年。

大牟田章『アレクサンドロス大王 世界を目指した巨大な情念』、清水新書 (No. 046)、1984 年。

塩野七生『ギリシア人の物語Ⅲ 新しき力』、新潮社、2017 年。

NHK『文明の道 ①アレクサンドロスの時代』、NHK 出版、2003 年。

NHK『文明の道 ②ヘレニズムと仏教』、NHK 出版、2003 年。